また、CO患者の命消えた

機能回復夢見たのに

坂井さん、直接死因はガン

三池大災害裁判闘争のながばまたひとつ、CO患者＝原告の命が消えた。

第五十二回メーデーの翌――二日のこと、三井鉱山の大災害責任を追及し、二度と大災害をくり返えさせぬために、今三池労組が進めている三池大災害裁判の原告＝CO患者の坂井武義さん（61歳。大牟田市早米来町一丁目五十五番地）が、入院先の大牟田市立病院で死亡した。直接の死因こそ胃ガンだったにしても、CO患者で死亡する人にガンが多い例から見て、その基礎病のCO中毒症に根本原因があることは疑えず、今後の取り扱いに注目しなければならない。

裁判闘争の今後については、故人の二男＝護さん（27歳。財務局勤務）が、「死んだ父の遺志を引き継ぎ、私がかわって原告となり闘っていきます」と、決意を固めているが、それにしても聞いなかばに他界した故人の無念さを思わずにはいられない。

なお、CO患者の死亡者は、三池労組員だけでさえ、坂井さんで二十七人にのぼり、その死亡率の高さとともに、ガンを死因とする例の多いことが注目される。

ガンも早や末期的症状と

ガンとわかったのは、昨年の五月だった。

以前からほとんど食欲がなくなっていたというが、昨年五月二十二日家で異常な吐血と出血を起こし、ただちに救急車で大牟田市立病院へ運びこまれた。

しばらく入院して検査を受けたが、再び吐血・出血を起こした。さっそく切開をすると、これがも早やガンも末期的症状で、どうにも手のつけようがない段階とわかる。

それでも手術すると一時小康状態となり、ひとまず昨年の八月退院した。でも、病院側からはすでに「命がもてても半年」と告げられていた。本人こそ知るよしもなかったが……。

ともあれ、さいわい体調は歩けるまでに回復。二男護さんの車で運ばれながらも、週に一回大地評病院と大牟田市立病院に治療に出向くこともできた。でも、再発を避けることはできなかった。

今年の二月、ついにその日がきた。大牟田市立病院に再入院。そしてメーデーの翌二日、午前三時頃から昏睡状態へ。午後二時二十五分息をひき取った。こうして故人は、苦しみにさいなまれながら、六十一年間の生涯の幕を閉じたのである。

故人が長く住んできた現住所の家には、今後妻のリツさん（60歳）と二男の護さん（27歳）、実母ヨシノさん（93歳）が住んでいくが、なお遺族はこのほかに栃木で暮らしをたてている長男の利光さん（31歳。BS社に勤務）と、すでに他家へ嫁いでいる知代子さんがある。

心から、坂井武義さんの冥福を祈っておく。

ときには感情爆発

根は誠実そのものの人

故・坂井武義さんは、昭和十二年の九月十六日十七歳のとき三川鉱に入社した。以来、坑内機械工―坑外仕上げ工などをへて坑内仕繰工となり、三川鉱炭じん大爆発のときは仕繰工として二番方勤務のために入坑、現場に到着する寸前に被災したもの。

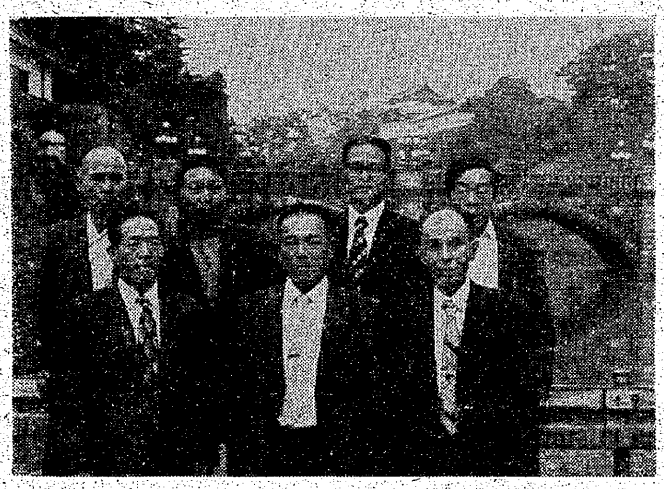
人柄は、被災前も被災後も一貫して誠実そのもので、どこまでも自分が闘ってきた三池労組を信頼しながら生き通した。

故人はCO患者にしても、その障害等級は七級だから、決して軽い方ではない。カルテも、「情意鈍麻」「記銘力障害」「計算障害」「四肢のふるえに硬直」「末梢神経失調」「肝肥大」など、CO中毒に共通する症状を記録しており、被災以後常に襲われる頭痛や動悸、いらいらや物忘れなど、本人としても悩み、苦しみの生きざまを余儀なくされていた。

家族にしても、ときとして爆発する、まったく原因のわからぬその怒りには手のほどこしようもなく、どれほど気を使ってきたことだったろう。

それでも故人は、一日も早く社会人として立派に生きれるようにならなければ、CO中毒症を何とか克服しなければ……、と常に積極的に生きることに心を砕いた。

別項の「漢字の書き取り」は、故人がすでに一回めのガンの除去手術のおかげで、いくらか健康を回復したあと、機能回復を夢見ながら、まったく自主的に練習したものだという。手・腕などのふるえに抵抗しながら、それこそ一字一字に生命力を注ぎこむようにして書いている故人の、立派な姿をしのばずにはいられない。



写真上は、ふるえる手でけんめいに書き方の練習。下は組合主催の退転者東京旅行で（向つて前列右端）。

手記

坑夫の系譜の人一として

筑豊に今一度砦を築かなければ……

石井出　かず子

常に死の危険がともなう地の底が労働の場である炭坑では、それ故に強い連帯の絆が地上の暮らしの中に生きていた。「私のものは皆のもの」「一椀あらば共に食わん」、の暮らしの感覚が黒い土壌の中にある。それが筑豊の炭坑であった。

たとえ閉鎖的といわれようとも何物も持たぬ者が肩を寄せあうには、分けあう一椀の暮らしを持たねば生きることができなかったからだ。支えあうぬくもりが杏く失ったものを、いや失わされたといえようとも、その手におされた刻印は、誰も忘れてはいないだろう。

※

明治の中期、雲深い中国山地の村々から、「赤いエントツ目あてに行けば、米のまんまの暴れ食い」へと、したたかな幻想を抱き、食えない村から出郷した私の縁者たち。坑夫募集人の甘い言葉が、「白いまんま」に重なったろう。

捨てた故郷と居座る故郷とを胸に抱え、たとえ地獄であろうとも「熊子食果シ、大根食果シ」、そんな村よりましかも知れぬと。

※

挙村離村した私の父方も母方も集団であった。

その足跡は筑豊一帯から、佐賀西戸崎、旧満州へと拡がる。彼らの持つ一つひとつの個体史は、全ての筑豊の鉱山（やま）の盛衰の歴史とかかわりを持つことはいうまでもないことである。それが今なお尾を弘き、多くの傷痕を抱きつつ暮らしている。

今は、坑夫の証となる黒い手帳を手に、けい肺に苦しむ二人を彼の妻は、「何もせんとブラブラしとる」稼ぎ手は、この妻の肩にある。廃鉱跡は工業地に近い程蘇生を見ることは少い。

※

私の父方は、飯塚の上三緒（かんみよお）炭坑、母方は目尾（しゃかのお）の古川炭坑、二度目の父方は直方の新入（しんにゅう）炭坑へと、最初の地下労働への足を踏み入れている。

一九二八年、かっての旧満州にある撫順炭坑で最初の父は、ガス爆発の救助中二次災害で亡くなっており、言葉のわからぬ中国人が幾度もマッチを擦っては、両手を拡げ叔母に告げたと聞く。

地上に上がった父の体は、一酸化炭素で赤い斑点を見せ、腸まではみ出ていたとか。当時私は三歳であった。

※

叫ぶような非常のサイレンが、炭住街の黒い屋根を覆うとき、一様に地上の坑夫も家族たちも、体ごと坑口へ向いており、親たちのきびしい顔を、小学生の私はともに受け止めていた。

祈った山ん神さんは、今はいとも簡単に放り出され、台座だけが残り、鳥居も失くなった神社も廃鉱跡によく見かける。一体、危険を神の加護へすり変え、増産を神に誓わせたのはだれ。

筑豊の地底を走る幾百の坑道には、この百年とれだけの災害が重ねられ、とれだけの坑夫の死が埋められたままであろうか。その上に、この国の近代が築かれたといっても過言ではなかろう。

地殻が鳴るような音を響かせ、地底に吸い込まれる人事を、呑み込まれそうな戦慄に安全旗を振るのも忘れ、尾灯を見極めようとしたあの坑口。今は、ベッドタウン化の整地に塞がれ、埋められている。

※

ボタがシャモットにされようとまだ地下に残る鉱脉の上に、今一度砦を築かねば、死んだ坑夫は浮ばれない。黒い手袋を裏返し、二度収奪へ向う巨大なるものへ。

×

右の一文は、炭鉱犠牲者と手を結ぶ会機関紙〝きりは〟（創刊号三月二十日発行）のなかの手記の一つで、筆者についてはただ〝美容師〟とあるだけで詳しくはわからない。ここに転載させていただいた。

×

遠くに住む原告へお願い

原告団の皆さん。とくに遠い地でお暮らしの皆さん。本紙にどうか、近況を寄せてください。離れていると、おたずねすることもできません。でも、決して忘れてはいません。ぜひ、お願いいたします。

――編集部

原告団消息

4月16日　午後四時半から組合本部で原告団事務局会議。

19日　CO患者家族の会役員会。

中山岩男さん、大地評曙病院に入院。

24日　CO患者＝小川紘志さん、垣内外科に入院。

5月1日　原告団、メーデー参加

2日　CO患者＝坂井武義さん死亡。

9日～10日　遺族会役員会。

14日　CO患者家族の会、受川さん（熊大病院入院）を見舞う。

住所変更　田中勝さん、東京都八王子市小比企町五三〇から、同じく八王子市めじろ台一丁目二番、めじろ台マンションA三一六（電話〇四二六―六五・一八〇六）に移転。

なお、橋本久子さん（故忍三郎さん＝CO患者で死亡＝妻）から便りいただく。